

イザヤ書55章1-11節「そのまま主に近づこう」

1A ただで買う 1-2

2A 聞いて生きる 3-5

3A 近いうちに求める 6-11

1B 豊かな赦し 6-7

2B 思いが異なる神 8-9

3B 口に戻らない言葉 10-11

本文

私たちの聖書通読の学びは、イザヤ書 53 章まで来ました。今日は、54 章から 57 章まで一気に読んでいきたいと思っています。今朝の箇所は 55 章 1-11 節です。一度に読むのではなく、少しずつ読んでいきたいと思っています。まずは、1-2 節を読みたいと思います。

1A ただで買う 1-2

1 ああ、渇いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。2 なぜ、あなたがたは、食糧にもならない物のために金を払い、腹を満たさない物のために労するのか。わたしに聞き従い、良い物を食べよ。そうすれば、あなたがたは脂肪で元気づこう。

今朝は、主の用意してくださったすばらしい恵みに対して、「そのまま主のところに来て、受け取ろう」という内容について読んでいきます。ここでは、「金を払わないで」「代価を払わないで」良い物を受け取りなさいという勧めを主がしておられますね。

私たちは先々週、主のしもべ、キリストが人々の罪の身代わりになって苦しみを受けられる預言を読みました。神はキリストが、私の罪を身代わりに負うようにされるという、とてつもないことをされることを読みました。それによって、キリストが罪人とされ、私が代わりにキリストの義によって、義とみなされます。こんなことまでやってくださった神がおられます。そして今は、廃墟となっている都エルサレムも、主はこれまでにない回復を与えて、ご自身の愛を示すことを約束しておられます。そして主は、この恵みを「無代価で受けなさい」あるいは、「ただで受けなさい」と言われています。

私たち人間の心理というのは、とても不思議です。しばしば起こることですが、「ただ」という言葉を聞けば、それは安価なもの、質の悪いものであるという方程式が頭の中で出来上がっています。私たちには、多くの宣教師の知り合いがいます。アメリカから来た人たちは、多くの場合、英会話教室を開いて、それで人々に接触しようとします。韓国の宣教師も、韓国語教室を開きます。その時に、本来なら授業料を受け取らずに、ただで教えても構わないと思っています。自分たちの生活

の支えは、主が備えておられ、自分を送り出した教会や個人によってその支援を受けているので、授業料はいただかなくても構わないのです。ところが、それだと人々が来ません。あるいは、来てもいい加減になります。なぜなら、「ただ」ということは、そんなに高価なものではない、質の良いものではないという先入観があるからです。

ところが、面白いことは、それである程度の授業料を受け取りますね。そうすると、全く同じ内容なのにそこに価値を見いだしてくれます。もっと勉強に熱が入るし、出席率も上がります。なぜそうなってしまうのか？それは、「自分自身が、その支払うお金を自分自身がもうけたものだ。」という自負を持ちたいからです。自分が努力して獲得しなければ、何かを受けることはできないのだと思っているからです。だから、ただではなく、自分で何か支払うことできるものに向かっていきます。

しかし、その自分の努力によってどこまで何ができるのか？というところまではあまり考えていません。自分で何度も何度も試してみたのに、それでもうまくいっていないのに、それでもまた自分でやってみたいと思います。主は、「なぜ、あなたがたは、食糧にもならない物のために金を払い、腹を満たさない物のために労するのか。」と言われます。自分がお金を払う、つまり自分自身から出てきたものによって得たいと思っても、それは自分には食糧にもならないようなもの、自分を満たすようなものではないのに、と言っています。

ずっと後に、イスラエルの残された民が主に罪の告白をする時に、「私たちの義はみな、不潔な着物のようです。(64:6)」と言っています。自分が成し遂げているその最高の基準を達していたとしても、それは不純だらけで、全く用をなさないということです。伝道者の書にはソロモンが、学問や知識を得ることを追及し、あらゆる事業を行って、あらゆる快楽を試してみたいけれども、すべてが空しかったと述懐しています。何か自分が残しているものは何もなかった、と後悔しています。そう、自分自身から出るものというのは良き物がないというのが、現実であります。

そのことを神が知っておられるからこそ、「代価を払わないで、良き物を買いなさい」と言われているのです。主のところに、そのまま行きなさいと言われていています。そして、それを受け取るのです。自分の努力や業績で獲得しようとするのではなく、恥も外分も捨ててそのまま受け取るのです。

2A 聞いて生きる 3-5

3 耳を傾け、わたしのところに出て来い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたとこしえの契約、ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。4 見よ。わたしは彼を諸国の民への証人とし、諸国の民の君主とし、司令官とした。5 見よ。あなたの知らない国民をあなたが呼び寄せると、あなたを知らなかった国民が、あなたのところに走って来る。これは、あなたの神、主のため、また、あなたを輝かせたイスラエルの聖なる方のためである。

主は、初めに「ただで、受け取りなさい」と呼びかけました。ここでは、「耳を傾けなさい」と呼びか

けておられます。子供のように、聞いたとおりを信じて、そのまま行動に移します。そうすれば、「生きる」と主は言われます。罪の中で死んでいても、それでも甦るように新しい命を得るのだと主は約束してくださっています。そして、その理由を仰っています。「わたしはあなたがたとこしえの契約、ダビデへの変わらない愛の契約を結ぶ。」と言われていました。一時的な契約ではなく、永久の契約を結んでおられます。ダビデへの変わりない愛の契約を結んでおられます。ダビデに主は、彼の世継ぎの子が神の国を受け継ぐ王となるという契約を結んでくださいましたが、その愛の契約は変わることはないということです。

イスラエルは、ことごとく失敗しました。神に執拗に反発して、それで主は彼らをバビロンに引き渡されました。七十年の捕囚生活を彼らは送りました。しかし、主はその愛の契約を破られたのではありません。無効にしたり反故にしたのではありません。ですから、主はご自分のところに戻ってくる者に、二度、いや三度、いや四度、どんなに自分はだめだ、同じことを繰り返してしまったと言っても、それでも、ご自分のところに戻ってくる者を受け入れてくださるのです。

主の赦しの力、決して見捨てないという御心は、私たちには計り知れないものがあります。人は、どれほど努力しても人を赦すのは、二度でしょうか、三度でしょうか。いや、たった一度の過失をいつまでも根にもって、恨んでいるのではないのでしょうか。相手が変わっていないのであれば、なおさらのことです。忍耐の緒が切れて決して赦さないと思います。けれどもペテロは努力しました。彼はイエス様に、「人は何度まで赦せばよいのでしょうか？七度まででしょうか。」と尋ねました。イエス様は言われましたね。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。(マタイ 18:22)」そうです、イエス様は七を七十度、490 回ということですが、これは「数えるのもあきらめてしまうぐらい、完璧に」という意味です。

だから、今度は私たちの番です。それは、「主のところに行くのをあきらめない」ということです。自分はこの肉の働きについて、御霊に従わないで再び失敗した。もうだめだ、あきらめよう。主はこのことについて、私を見捨てておられるのだ、と決めつけないことです。主は変わらない愛の契約を結んでおられます。この方のところに来て、もう一度、御霊に拠り頼む決断を試みるのです。

3A 近いうちに求める 6-11

1B 豊かな赦し 6-7

6 主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。7 悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

これは三つ目の呼びかけです、「主を求めよ」であります。今、主を求めなさい、もし罪を犯してしまつて悔いているけれども、まだ踏ん切りがついていない。ほら、今、主を求めなさい、そうすれば、主は憐れんでくださる、豊かに赦してくださると約束しておられます。そしてここで大事な言葉が書

かれています。「お会いできる間に、近くにおられるうちに、呼び求めよ。」であります。今、お会いできる時に求めなさい、と言われていたのです。使徒パウロが、「確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。(2コリント 6:2)」と言った通りです。

けれども、これは「たった今、主に立ち帰らないと主はあなたから離れていく。その後は会うことができない。」という意味でしょうか？そのように聞こえます。けれども、そうではないように思われます。今、恵みの言葉を聞いた。主に立ち帰れば、豊かに赦してくださるという恵みの言葉を聞いた。もし、ありのままの自分で行かなければ、恵みが恵みでなくなる。何か自分が準備して、よそ行きを来て神の前に出ていかないと考えるから、「今はよしておこう」と招きへの応答を延期してしまうのだ、ということです。やはり、自分のほうで何かを用意してからでないと、神の前に出ていけないと考えるから、「近くにおられるうちに、呼び求めよ」と主は言われています。

ここで覚えておかなければいけない原則があります。「主は、私たちを、これまでの自分の正しい行ないによっては、私を受け入れられない。」ということです。正しいことを行なっても、もし今、神の前に心が正しくなければ、これまでの正しいことはすべて無に数えられます。全く何も正しいことをしたとみなすことはできません。しかし、今度は反対に、「主は、私たちを、これまで行なった自分の悪いことすべてがあっても、それでも受け入れることがある。」ということです。今、悔いた心で、主の前に出ているのであれば、これまで行なった悪いことが無数にあっても、すべての罪を赦して、清めてくださいます。それは、今が大事なのです。主は、過去に何をしていたのかという業績をご自分のところに持つてくるのではなく、たった今、ありのままの自分を主の前に持つてくるその人が、ご自身を信頼し、ご自身に拠り頼むということで受け入れてくださいます。

2B 思いが異なる神 8-9

8「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。…主の御告げ。…9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

主が豊かに赦してくださることについて、その大らかさについて、私たち人間の思いをはるかに超えています。それを主は、「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。」と言われていました。また天と地を比較して、ご自身の思いと道は、あなたの思いと道よりも、はるかに高いのだと言われます。ぜひ、これはよくよく理解しておきましょう。主は全知の神です。そして永遠の方です。神の思いははかり知ることができず、そしてその計画は永遠の先を目標にしたものであります。そのご計画に基づいて、この今を動かしておられます。しかし、それだけではありません。神の慈しみ深さもまた、私たち人間の持つ憐れみとは比べ物にならない、とてつもない宇宙的な奥行きを持つているのだということです。だから、私たちが普通に思う道とは、神の道は異なっているのです。

聖書に出てくる、神に愛された人々、そして神に用いられた人々のことを考えましょう。その中に、完璧な人がいたかという、そうではありません。多くの人が完璧になることが神に喜ばれることだと思います。それを少なくとも目標にしています。しかし、神の思いはかなり違うようです。

アブラハムは神に祝福され、多くの信仰者の父となりましたが、彼はサラを自分の妹だと言って偽りました。それも一度ならず二度もそう言ったのです。ヤコブはどうでしょうか？彼こそが、最も愛されるべきではない男です。兄から長子の権利を奪い取りました。偽って父イサクに、自分がエサウだと言って祝福を受けました。ところがどうでしょうか、主はエサウを退けて、ヤコブを愛されたのです。彼についての悪いことが、聖書には書かれていない。つまり、主はヤコブに悪を見いだしておられなかったのです。ダビデはどうでしょうか？彼は、パテ・シェバと姦淫し、その夫ウリヤを殺す罪を犯しました。しかしダビデは愛された者であり、彼への神の約束は破られることはありませんでした。そして、イエス様に連なる弟子たちも失敗と欠点だらけです。パウロは、元ユダヤ教テロリスト、けれども神は彼を選んで、異邦人への使徒とされました。

私たちはこのような神の取り扱いを見ると、いらだたしいぐらいに理解できなくなります。「どうして、神はこのようなくさしいヤコブを選ばれたのですか？」と思うのです。ここが、私たちの思いと神の思いの違いなのです。神の恵みは、私たちが苛立たせます。私たちは正攻法で、自分の義を積み立てて神に認められて行こうとします。「これだけ、しっかりやって来たのだから、神は私を祝福しなければいけない。」と思います。ところが、そうではないことに気づきます。そうではなく、神はご自分の呼びかけに応じていく者たち、自分がどうであるかまるで気にしていないで、そのままご自身に近づく者たちに、ただ恵みを施しているだけなのです。神はただ私たちに良くしたいのです。その心をそのまま受け取る者たちに、ご自分の恵みを示されます。自分がどれだけきちんとしているか、という基準ではないのです。

3B 口に戻らない言葉 10-11

10 雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

主は、天からの雨が天に戻ることがないように、ご自分の口から出た言葉は、決してご自身の口に戻らないということを仰っています。必ず主が語られたことは、その通りに成就するのだという約束です。パウロも似たようなことを語りました。彼が牢獄に入れられている時のことです。「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながられています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。(2テモテ 2:9)」主が、私たち一人一人に語られる恵みの言葉は、必ずその通りになります。自分自身がつながれているような状況にあろうとも、その通りになります。

私たちが、この生きている世界において、自分の生活が成功したと言わしめる者は何でしょうか？その生涯が成功することでしょうか？自分のできないことが、主の力によってできるようになりましたというような成功物語でしょうか？そういった見方をすると、やはり聖書に出てくる人物はどれも成功しているように見えません。試練や苦しみがあったし、パウロの場合、最後は牢屋で過ごし、多くの弟子たちは彼を見捨てました。そしてローマ皇帝ネロの前で死刑判決を受けて死んだのです。どうしても恵みの言葉の約束が成就したように見えません。しばしば私たちは、エレミヤ 29 章 11 節から、「神のご計画は、幸いなものであり、将来と希望を与えるものだから。」ということで、誰かが逆境の中でも成功したというような話なのだろうと思ってしまいます。そういったようには必ずしもなっていない聖徒たちは、この世界に数多くいます。

では、どういう基準で主の恵みの言葉が、必ず成就すると言えるのでしょうか？それは、自分の人生によって、数多くの人々がまことの神に触れることです。私たち自身の基準で、自分の人生が成功するかどうかということではなく、自分の生きている内には見付けることはできない。あるいは自分自身には知らされていないかもしれないです。自分は関係ないのです、神ご自身とその言葉が自分を通して確実に広がっていくことです。その人は人々からは注目されず、そのまま死んだとしても、その人の証しが人々を神に立ち返らせます。自分の人生がいかにも失敗のように見えても、神は確実にご自分の働きを行なわれています。そして、あなたを用いておられるのです。そして人々は、あなたに注目するのではなく、あなたを通して神を見ることができ、神と共に歩む生活を送るようになるのです。